進化と自殺

昂綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
進化と自殺

【Ｎコード】
Ｎ９４６８Ｓ

【作者名】
昂綺羅

【あらすじ】
人は進化する生き物であるそれだけの話を作ってみました。もう少しうまく書けたらなぁ。いずれもう少し自分がうまくなったら、リメイクしてみたいです。

（前書き）

なんか、ストーリーを作ってる段階は良いかなぁと思ったんですが。
うまくまとめきれずに失敗。
それでも今までで一番ましかも

「人は進化をつづけて生きていく。
それが出来ない人間は死ねばいい。」
中学時代の俺の言葉だ。
それに従い俺は自分を高めてきた。高校3年の今現在まで。
その言葉を実行するため、1年の最初のテストは白紙提出した。
そして回を重ねるごとに少しづつ点数をあげる。そうすることで進化していく過程を数字で表そうした。
そして現在は、学年首位。今ではテスト用紙に次のテストのテスト範囲であろう範囲のテストを予想して作っている。少しわかりづらい言い方になったな。
ふむ、授業も同様だ。
授業の最初は「分かりません」っと手を挙げ、授業の途中から予習して来た内容を先生に代わってみんなに教える。もちろん多少強引な手を使ってだが。
2年の途中からはもう俺が最初から授業を始めるまでに進化した。
しかし、俺は後悔している。
俺は何をしていたんだ。
俺は恋愛に関しては、全く進化していなかった。
本来なら
1年⇒彼女いない
2年⇒気になるあの子
3年⇒彼女誕生
くらいの軌跡はたどるべきだった。もちろんこれよりも劇的な進化の軌跡も構成出来るが、過ぎた事を熱く語ってもしょうがない。
あぁ、もう俺は死ねばいいのに。
「あぁ、そうだ！　死のう！」
進化できずその場に止まってしまった俺は死んだ方がいい。

退化は一つの進化の形である。それすらもしないのはただのゴミだ！　進化と退化、どちらの軌跡もたどらない人間なんて物質にすぎない。
最後にせめて死に方は進化していこう。
「さて、どう言った死に方がいいか」
「正利君、死ぬの？」
ん、誰だったか。
「えーと」
確かこの顔は
「千歳　綾子か」
「あったりー。……で、死ぬの？」
「あぁ、俺は進化できなかった。もう死ぬしかない」
「へぇ」
何やら嬉しそうにほほ笑む千歳。
「じゃあ、一緒に死のうか」
何やら、おかしな言葉を聞いた気がする。
「何だって？」
「だから、一緒に死にましょうって」
曲がりなりにもココは教室。幸い他のクラスメイトには聞こえなかったようだが。
「今度ね、死のうと思うの」
「分かった。分かったから少し場所を変えよう」
俺は千歳の手を掴み教室を後にする。

さてココで特記しておくが、クラスのでの千歳綾子は根暗な生徒からは程遠い明るい生徒であることはさっきの会話である程度伝わったと思う。
そして顔もそこそこ、と言うよりかなり可愛いほうの部類。成績は中の下。少し悪いくらいだが、そういう点も逆に可愛いと言えなくもない。

以上が表面的な千歳綾子を俺が評価したデータである。

「で、さっきの話だが」

俺は、授業をさぼって屋上に来ている。今までの俺からすれば凄まじい勢いでの退化だが、まぁ停止よりはよっぽどいいので気にしない。

「なんでお前は死にたいと思うんだ？」

「何でって、まぁそれはオイオイ話すとして」

なんでだよ。っとつっこみを入れたいが話の流れを切るのもあれなので黙っておく。

「こんどね、私が主催で自殺のオフ会を開くの。だからそれに正利にも参加してもらおうかと思って」

呼び方が呼び捨てになった。うむ、進化するのは好印象だ。

「しかし、俺が求めるのは進化的な死であって、停滞的な死ではない」

「えぇー、死ぬなんてどんなでも同じだよ」

まぁ、確かにそうだが

「そういう停滞的な考え方は嫌いだ」

「ふーん、私は正利の事好きだけどなぁ」

「え？」

「そうだ、じゃあ～。このオフ会に来てくれたら、私が死ぬ理由を教えてあげよう！」

何を言い出すんだ、この女は。

「進化って言うのは、知識が増えるのも進化の一つでしょう？」

「ふむ」

それも進化の一つである事に変わりはない。

「だから、来てくれたら私に対しての知識が増えまーす。で、少しだけ進化出来てから死ぬよ。これならなかなか進化的な死だと思うけどなぁ」

なるほど、確かに進化するために死ぬと言うならそうかも知れな

い。
「よし、それなら良いだろう！」
「それじゃ、メアド教えて。日程とか決まったらメールするから」
「まだ、決まってなかったのか」
そういいながら取りだした俺の携帯には初めて女の子のアドレスが加わった。

メールが来たのは3日後だった。ちなみにあの日以来千歳は学校に来ていない。死ぬからいいや、とでも思っているのだろう。どこまでも停滞的な人間だ。
『やぁ、まさとしっち。久しぶりだねぇ』
……良いんだ。ココでつっこんでも進化にはつながらない。
『日程決まったよ（＊＾＾）ｖ
次の土曜の午後3時に駅前の広場に集合！
自殺場所はねぇ！　そこから山に入って行くの！
一応、まさとしっちは学校行ってるみたいだから休みの日に合わせてあげたよ（＾＾）ｖ
それじゃ、時間厳守！
って訳じゃないけど5分以上遅れたら置いて行くかも。
綾子より』
うん、現代っ子からしたら少ないのかも知れないが、それでも死のうって奴が笑ってる顔文字使うなよ。死ぬ気あるのか？　こいつ。
ちなみに俺は、現在退化キャンペーン実施中である！
効率的に進化をつづけて行くには時に退化する事が重要だ。
ま、それだけの事だけど。

約束の土曜日、俺は午後3時ぴったりにココに来た。
1秒のずれもなくここ来た。
なのになぜ千歳はいない？
嵌められた？　どっかで俺の事を撮影してるのか？

５分以上遅れるなと言った人間が１０分遅れてるんだ。そう考えるのが妥当だろう。
「はぁ。俺が馬鹿だったのか」
もう帰ろう。
？　体が前に進まない？　そう感じたのだがどうやら違うようだ。俺の肩には明らかに女性のものである手が置かれており、振りえると息を切らした千歳がいた。
「ご…ごめ……ぜぇ、ぜぇ。あぁ。ごめ……あ」
いや、分かったから。
「まぁ、落ち着け。これでも飲め」
俺はさっき買って、結局開けなかったお茶を手渡す。
「あり……ごく……ごく……ふう！」
うん、落ち着いたようだ。
「ごめん、Ｆ〇の裏ボスの攻略に時間がかかって。ＨＰ１００，０００，０００って半端ないね」
「お前は……ホントに死ぬ気あるのか？」
本当に……『自殺するのにゲーム攻略で遅れました』って訳が分からんぞ。
「で、他のメンバーは？」
「ん？あぁ、あそこにバンがあるでしょう？　あれの中。持ってる人がいるって聞いたからその人の車に集合って事になったの」
それは事前に伝えるべきじゃなかったのか？
「私が『掌に拳銃を』って言うと全員そろったって事だからたぶんそれまで動かない。それを言った奴が主催者っていう一つの隠語だね」
「……分かった」
本当に手が込んでいる。死ぬ気の奴がする事とは思えん。
「じゃあ、行こっか」
俺は手を引っ張られてバンに乗り込んだ。
「皆さんこんにちは」

千歳が挨拶するが誰も答えない。
「うーん、いい感じに暗いねぇ。これでこそ自殺前みたいな？」
そう言いながら千歳は車の中を見渡す。
「ひぃ、ふぅ、みぃ……」
まさか、こんな数え方する奴が未だに居るとは……。
「よし、『掌に拳銃を』！」
千歳がそう言うとエンジンが掛かる音がした。
「じゃあ、座ろうか。としっち」
「また進化したな」
「え？　何が？」
呼び方が。
「何でもない。戯言だ」
「ふーん」
納得いかない風だったが、興味がないのか席に着く。
「……目的地までどのくらいでどの位で着くんだ？」
俺の後ろの奴が千歳に質問する。
「えーと、運転手さん。どの位で着くの？」
「おう！　俺のバンなら１０分もあれば余裕だぜ！！」
「お、自慢の愛車ですな」
運転手らしき人物はかなり威勢が良かった。本当に自殺のオフ会なのか？
いや、俺の後ろからはそういう雰囲気が漂っているのだが、俺の隣と前の奴が車談議を始めてとても死にに行く雰囲気とは思えない。
「あ、そうだ。今回の死に方はテントで練炭焚いて死にますんで。ただ、この正利くんは死ぬ前に皆さんの事が知りたいみたいなんで、自己紹介とかします」
あれ？
「みんな、何で死にたくなったのか。それを正利君に話してあげてね」
……まぁ、その提案は嬉しいんだが俺に責任押しつけるのは酷く

ないか？
「まて」
さっきの奴が話しだす。
「聞きたい事が２つある」
「はいほい、何でしょう？　死ぬ前に疑問はできるだけ解決しておいた方がいいよ」
「何で車の中でやらないんだ？」
なるほど、確かにそうだ。車の中でやればテントを張るなんて手間は書けないで済む。
それに対する疑問は運転手から返された。
「てめー、俺の車の中をススだらけにするつもりか！　そいつは許さねぇぞ！」
死にたがりが『エクスクラメーションマーク』を多用するのはどうにも違和感がある。
「……分かった」
男は納得してない風だったが、面倒くさくなったのか次の質問に移る。
「２つ目だ。何で俺がそいつの為に自分の言話さなくちゃならねぇ」
「うーん、彼には進化願望があってね。少しでも多くの事を吸収してから死にたいらしいんだよ。人生最後の人助けだと思ってやっちゃってよ」
「嫌だね」
主張は分からないでもないんだが。
「それならそれでいいけど、話せる人には話してもらうよ？　その間君は……『朝日』君は死ねないよ？これはレクリエーションだからね。君だけ先に死ぬのは許さないし」
朝日と呼ばれた瞬間男は動揺していたがすぐに落ち着いて
「あぁ、それでいい。俺が話さなくていいのなら構わない。他の奴が話すとも思えんがな」

さて、朝日と呼ばれた男の思惑とは別に他の3人は話を聞かせてくれた。結局自殺しようなんて奴は自己主張が激しいのだ。
金髪の女は
「親が五月蠅くって。働け働けって。働けないからこうして困ってるのに」
ゲームをしていた中学生は。
「別に、俺は人生なんて簡単すぎてつまらない」
運転手は
「俺か？　実は借金が溜まっててよ！」
と言う事らしい。
「それじゃ、私の番かな」
千歳は、そう言うと語りだした。
「たぶん私が一番長くなるけど良いかな？」
その質問は全員の沈黙という形で受理された。
「みんな言うんだけど、私って普通の人から見たら可愛いみたいなの。でも、それ以外はダメ。勉強も運動も御裁縫もお料理も…ｅｔｃ．とにかく私は容姿に恵まれただけで他には何もなかった」
……とりあえず容姿がいいのは誇ってるのかな？
「でもね、それじゃ私は嫌だったの。だから勉強も頑張ったし、部活も運動部に入って人一倍努力したの。お料理だって覚えようとして手は切り傷だとか火傷だらけになった。その手で御裁縫だってやったし、みんなの話に合わせようとして興味のないドラマも見た。人並みに趣味が欲しかったからファッションだって気を使ったし、彼氏も作った！　他にもね、いろいろ、ここでは言いきれないくらい色々したんだよ？！」
千歳は興奮しているようで途中から叫ぶように語っていた。
「……でもね、どれもね、上手くいかなったの。そして人に認めてもらえなかったの。みんながね言うの。『大丈夫、千歳ちゃんは可愛いから』って。容姿がいいから他はできなくてもいいんだよって、だ～れも私を認めてくれないの」

あの後、千歳は同じ事何度も繰り返した。ただ、ココに居る誰かに話しかけると言うよりは一人でしゃっべているように。
「ふむ、それがお前が死にたい理由か。進化できない事が苦痛になったと、そういう訳だな？」
「そうね、あなた風に言うならそうなるのかしら」
「ダメだ。その程度か」
そう言うと、千歳を含めた全員がこっちを見た。
「この程度では進化できたとは言わん。何だ、全員テンプレ通りの自殺動機か？　あぁ？！　その程度悩みになら解決法は有るだろうが！」
と言うより早く帰りたいな。俺は、次は量子力学を修めて進化したいんだ。よく考えたら死んでる暇がない。
「全員、進化しろ！」

なぜか俺は病院に居た。
いや、起きた時はマジで訳が分からなかった。
『大丈夫ですか？　まったく、あの場であんなこと言ったら殴られることくらい分かったでしょうに』
起きて早々、千歳は俺にそんな事を言いやがったのを覚えている。
『とっしーは学年首位なのにそんなことも分からないんですか？』
次の言葉はこれだった。昨日の事だから覚えてる。
で、今現在も横で偉そうに文句を垂れている。
「何で、Xが二乗になる訳！？」
なぜか昨日
『あれだけ、偉そうに進化しろ何て言ったんだから進化に付き合いなさい』
と、言われ俺が勉強をみる羽目になった。
ちなみに他の参加者はと言うと、全員で自殺しようとしたらしいが（気絶した俺を道連れに）運転手と千歳で必死に止めたそうだ。

なぜか、と聞くと
『運転手の人……日下部さんはね、元々そのつもりで来たみたい。全員を無傷で保護するために催涙スプレーとか閃光弾とか手錠とか、軍隊顔負けの装備で来てたよ』
と言っていた。ちなみに
『お前は何で止めたんだ？』
と聞いたところ。
『私も、場合によっては死ぬつもりはなかったの。話した事は本当だし死にたいって思ってたからオフ会を開いたんだけど、誰か一人でも「止めよう」って言ったら止めるつもりだったし』
との答えが返ってきた。
『それに、あなたを誘ったのも……』
顔を真っ赤にして小声で言っていたのでこれ以上は聞きとれなかったが、何やら他にも理由はあったようだ。
「ねぇ！　何でかって聞いてるでしょう！？」
なんか、呼び方と言い俺に対する態度変わり過ぎじゃないか？
「まぁ、進化してるならいいか」
「はぁ？　良いから教えなさい！　まっしー」

最後に俺からの有りがたい言葉をお前たちにくれてやる。
この言葉を胸に刻みつけて、せいぜい進化しろ。
『人は進化する生き物だ
進化できない奴は進化すればいい』

（後書き）

ちなみに最後の言葉はあくまで正利の言葉であり、俺の矜持ではありません。

俺にはマジで自殺願望しかないんで。

ただ、自殺しない当たり俺って前向き人間なんだな～（しみじみ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9468s/

進化と自殺

2011年5月3日12時10分発行